

海軍ニュース：中国の空母カタパルト

漢和防務評論 20160703 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国海軍は、遼寧省興城市の空母訓練施設内に訓練用模擬カタパルトを2セット建設しているようです。また上海江南造船所では空母用カタパルトの製作を開始した兆候があります。

旧ソ連もウクライナのNITKAにカタパルト訓練施設を作ろうとしている最中に国家崩壊と成り完成しませんでした。

中国が開発できるのかどうか？その目的は何か？成功すれば将来、中国空母艦隊の戦力も飛躍的に向上する可能性があり、目が離せません。

KDR バンコク平可夫特電：

2016 年の最新衛星画像によると、中国遼寧省興城市に所在する中国海軍空母パイロット訓練センター内に2本のカタパルト装置が建設中であることが分かった。周囲に貯水タンクが2個あり、付属設備は模擬ボイラー、蒸気タービンの可能性があり、蒸気カタパルトを採用した可能性が高い。電磁カタパルトの場合、巨大な電気エネルギーを必要とするが、付近に発電設備は見られない。電力の問題から、米軍でも核動力空母のみが電磁カタパルトを装備しているが、技術は未成熟である。

2本のカタパルトを採用したことは、中国海軍が大規模な訓練施設を建設しようとしていることを示す。拘束装置、スキージャンプ式離陸滑走路も2セットであり、同時に2個連隊の空母パイロットの訓練が出来る規模である。KDRは、最近インド及びロシアが建設中の空母パイロット訓練施設と中国興城基地を比較してみた。中国興城の方が規模がより大きく、設備も整っていた。インドのGOA訓練センターは軍民両用で、民用飛行場にある。

しかし興城の施設には確かに疑問点がある。なぜ2セットの訓練施設が必要なのか？特にカタパルトはなぜ2本必要なのか？

かつてのソ連は、毎年1艘ずつ空母を就役させる計画があった。しかし訓練施設はNITKAの1セットだけであった。現在国際的に見ても、中国の空母訓練センターだけが、カタパルトもスキージャンプ台も保有している。ソ連のNITKAの訓練施設は、カタパルトが未完成のまま国家が崩壊してしまった。試験も未実施であった。

現在の分析では、中国の大空母建設計画は、相当野心的な大事業になる可能性があり、大連の空母が完成した後、その後の空母建造は同時に2艘ずつ建造する方式を採用するのであろうか？だから訓練施設が2セット必要なのか？

諸々の動向をみると：江南造船所は空母用の蒸気カタパルトの製造を正に開始しようとしている。言い換えれば、スキージャンプ式離陸を採用する空母は、現在の”

遼寧”と建造中の大連空母のみとなる。前者は本来訓練艦である。それなら、なぜまた2本のスキージャンプ式離陸滑走台を建設する必要があるのか？金が余っているからか？これはそうかもしれない。海軍事業が膨らむに従って獲得する予算はますます肥大する。我々はこれらの中国方式を理解できるだろうか？

しかし KDR がソ連の3艘目の空母ウリヤノフスク号の設計図と建造意図を詳細に分析したところ、多くのことが分かった。中国人は1990年代、ウクライナが困窮した際、同国から同号の設計図の一部を取得した。この核動力空母は、スキージャンプ台、及び蒸気カタパルトを併設していた。その理由は、ソ連軍事工業の信頼性が低かったからである。ソ連海軍は、蒸気カタパルトを信頼していなかった？万一故障したら、お手上げだったから。したがって2つのシステムを併用した。したがってウリヤノフスク号の船体全幅は広がった。滞空する空対空ミサイル搭載の戦闘機はスキージャンプ離陸を、早期警戒機及び大重量の攻撃機は蒸気カタパルト離陸を選択した。

興城に2セットのスキージャンプ台を建設する理由を分析した結果、KDRは1つの結論に達した。すなわち：3艘目以降の中国空母には、ウリヤノフスク方式に似た方式を採用する可能性がある、と。一旦カタパルトが故障しても、スキージャンプ台に切り替えられるからだ。

なぜ2セットのカタパルト訓練施設を建設するのか？可能性のある結論。すなわち：A、1本のカタパルトは初期の各種実験、テスト用である。もう1本は訓練に使う。B、ソ連と同様に技術に自信がなく、1本を予備とする。たとえ1本のカタパルトが故障しても、もう1本で訓練が継続できる。

C、確かに空母部隊建設の大計画が存在する。今後も全て同時に2セット建設する方式を採用することによって、同時に2個連隊の訓練を賄うことが出来る。

現在訓練用のJ-15が十数機不足している。しかし訓練システムが2セットあると言うことは、中国海軍の遠大な野心を見ることが出来る。一方、中国海軍は、人材育成を軽視している可能性がある。空母の乗員を養成するのは容易ではない。”遼寧”艦のそれほど激しくない現在の訓練状況を見ると、厳しい人員不足が見えてくる。特に不足しているのは空母パイロットであろう。米空母部隊は、建設後80年経っている。ロシアの空母でさえパイロット不足であり、熟練した甲板管理人員等々が不足していた。

更に見逃せない点は、興城基地のスキージャンプ台訓練施設が地面に線を引いて空母全体の形状と大きさを模擬している点である。平時の訓練では、この模擬甲板を離着陸管理や弾薬管理人員の専用にするのであろうか？そうだとすると、今後一旦訓練が始まると、全てのJ-15戦闘機はこの地面に線引きされた空母に集中し、この飛行甲板で離陸と管理の状況を完全に模擬することになる。注目に値する。

以上